

「コロナ騒動」が世間を騒がせ、医療のみならず社会、経済に大きな影響を与えています。この Covid-19 に関しても、免疫が重要であることを再認識させてくれました。

がんもまた免疫がその予後を左右します。このコラムでは、がんに対する免疫の重要性を認識する最近の治療法の動向を述べてみたいと思います。

StageIII以上の転移のある場合、標準治療（手術、抗がん剤、放射線療法、最近では免疫チェックポイント阻害剤）では根治は困難で、延命治療が主体となります。点滴療法研究会の会員の方は、高濃度ビタミンC点滴療法、免疫療法（樹状細胞療法、NK細胞療法、自家がんワクチン療法など）、水素療法（ガス、点滴）、温熱療法、サプリメントなどを組み合わせながら、日々がんの治療を行っておられることと思います。

その中で、最先端治療として最近注目されつつある、光がん免疫療法についてご紹介したいと思います。

体内のがん組織のごく近くにレーザー光（MLDS:マルチレーザーデリバリーシステムという医療レーザー機器）をあてて腫瘍を破壊し、その後がん細胞外に放出された物質（抗原）により刺激された免疫細胞により照射部位以外のがん細胞（遠隔転移）も異物として攻撃されます。外部からはもちろん、0.5ミリのファイバーを使って静脈血管内、間質内、関節内からも照射が可能で、腫瘍周辺に多方向から集中的にレーザー光を当てることができます。CTC（血中循環がん細胞）除去などのがん再発予防にも効果的です。

治療には、前日にリポソーム加工した光感作物質を点滴し、翌日に低出力レーザーを使用して患部や血管内に特定波長の光線を照射します。それにより光感作物質が集積したがん細胞が反応して破壊されます。光感作物質とは、レーザー光を当てることによって、周囲にエネルギーを放出し、酸化反応を起こす色素ですが、がん細胞にのみ蓄積する脂質の膜に包んで、100nm（ナノメートル）くらいの大きさに加工（リポソーム化）します。点滴した静脈内の光感作物質は、EPR効果により、がん細胞に集積します。したがって、がん細胞のみに集積する特性により正常細胞へのダメージが少なく、免疫細胞も十分に働くことができます。

現在、楽天メディカルの申請により、近々再発頭頸部がんの適応で承認される予定です。

すでに国内の自由診療クリニックでもこの治療が開始されています。詳しくは、日本先制臨床医学会統合腫瘍治療部門のセミナーなどで説明いたします（2020年11月ごろ）。

